

教育は親と当人に選ばせよ

日本橋女学館短期大学学監・教授 池 木 清

昨年未の教育改革国民会議の報告を読んで、まず目にとまったのは「人は皆、他人と違って生まれてくる」との一文である。これに続けて、種々の植物の例を挙げ、それぞれに応じて全く異なる育て方が必要なことを述べ、「人間も同様である」と断じている。

日本の学校の制度や実態は、これと正反対で極端なまでに画一的である。就学年齢はもちろんのこと、就学後も年齢に基く厳格な学年制を布き、学習成果とは無関係に全員一律に一年経てば一学年だけ進級させる。上級学校への入学も極めて硬直的で、前段階の学校を卒業していなければ次の段階の学校に入れない。高校に行かない人のために大検はあるが、所定の全科目の試験に受かって18歳にならないと大学入学資格を認めない。大学教育を受けるに足る能力があると公証しても18歳までは遊んでおれというわけだ。近年、千葉所在の一大学が1年間に3人ほど17歳を入学させたら、全国ニュースとして大きく扱われるありさまで、17歳はおろか、10代前半の大学生さえいるアメリカとは大違いである。

学習指導要領が学年別に教科の内容を定める一方で、前記のような成果を問わない機械的進級が行われるので、同じ年齢の人間は全員同じお仕着せの教育を受けることとなる。たとえば言えば、年齢ごとに既製の寸法の帽子が先に作られており、子どもの頭の大きさ（中身）は、全員その既製帽に合わせろという仕組みである。

義務教育を大義名分に、入る学校も教育委員会（最近では品川区など極く僅かの例外はある）が一方的に決め、担任教師も学校が勝手に決める。親や当人の意思など一切顧慮しない。制度上は私立に行く自由はあるが、私立小学校など、軍国主義時代に徹底的に弾圧され、戦後も簡単に作らせないので、實際上大多数の国民にとって学校選択の余地はない。

いったん学校に入ったら、教科の内容だけが画一化しているのではなく、「気を付け」「休め」とか「前へ習え」「直れ」とか「右向け右」とか「起立」「礼」とか軍隊式の号令が降ってくる。号令通りに従順に動かなければ、ぶん殴られかねない。法律で教師の暴力は禁止されているが、実際には横行している。

その上、給食制度が戦後大々的に学校に持ち込まれ、皆に同じ物を同じ量だけ食べさせる。残したりすると「好き嫌いなく食べる」と教師に怒られる。アレルギーなのに、教師に無理強いされ、取り返しのつかないことになった例もあった。中学校になると、選んで入ったわけでもないのに、「校則」と称して生徒の服装や持ち物まで勝手に統一する。しかも「服装検査」とやらで、男の教師が女子生徒のスカート丈まで計って文句を付ける念の入れようだ。髪型や髪の色はもちろん、髪を結わせるゴムや靴下の色まで規制する。こんな学校に上手に適應できる子の方が不思議なぐらいで、不登校が41人に1人なんて驚くにも当たらない。学級崩壊だって起こって当然だろう。

そもそも義務教育は、読み書き計算など基礎的な知的能力を全ての国民に保障すること

を目的として近代になって世界的に普及した制度で、親の責任で学ばせ得る子まで、むりやり学校に来させる必要はない。現にアメリカでは学校に行かず親が教育している子どもなど珍しくもない。日本でも、軍国主義時代に施行された国民学校令によって「家庭その他」で教育する道を閉ざしてしまっただが、明治以来昭和 10 年代半ばまでは、小学校令できちんとそのような教育が認められていたのである。

顔形が皆違うように、頭の中身も皆違う、とわかったのなら「奉仕活動を全員が行うようにする」などという国民会議報告にあるような画一的要求は出てこないはずだが、これを唱えた委員の顔を立てたのだろうか。同報告には「教育は、本来、親、当人、社会全体が共同して行うもの」ともある。そのためには、親や当人が最大限自由に教育を選べるように、社会全体が可能な限りたくさんの選択肢を用意すればよいのである。

紙数の制約から、随所で説明を省略した。最近の拙著『男女共同参画社会と教育』（北樹出版）の第 2 部を読むことで補っていただければ幸甚である。

(注)原稿を PDF 化した。現物は新聞のコラムであるから、そのような体裁になっている。